

# ビルマの民話に現れるウサギの性格について

平 川 紀 一

## 1. 民話の中の動物たち

これは一つの試論である。10年ほど前のことであるが、河出書房で企画した『世界民話全集』<sup>(1)</sup>の中のビルマ篇とチベット篇の訳出を依頼され、その材料をあれこれと検討していて気がついたのは、ビルマの民話で活躍している動物のうち、ウサギがとびぬけて重要な役割を果たしていることであった。<sup>(2)</sup> おもしろいことに、日本の民話の中にも、ウサギを主人公としたものがいくつかあり、その性格づけがビルマのものと酷似している。その時以来、民話に登場する動物の性格の比較を通じて、文化交流のありようをあとづけてみたら、と考えてきた。

ウサギというと、私たちの頭に浮かぶのは、耳の長い赤い眼をしたかわいらしい小動物である。ところが世界各地の民話や伝説をみると、ウサギは智者であったり、時には狡猾で邪悪であったりする<sup>(3)</sup>。悪賢い動物といえは、だれでも思い出すのはイソップのキツネであろうが、インド民話ではヤマイヌが、北欧ではカエルが同じような役割を振り当てられている。日本でも化けたり、人を化かしたりする動物にキツネ・タヌキ・ムジナ・カワウソなどが挙げられ、魔性のものとしてはネコやヘビ・カラスなどが知られている。しかしウサギが悪賢い動物であるというのは、ちょっと意外な感じがしないでもない。

ウサギは哺乳類の兔形目（重歯類）に分類され、その下にナキウサギ：アマミノクロウサギ：ノウサギ：カイウサギが属している<sup>(4)</sup>。<sup>みなかたまくす</sup>南方熊楠は野兎・熟兎・岩兎・跳兎（蹠鼠）などを挙げている<sup>(5)</sup>が、この小論ではイエウサギ rabbit（以下単にウサギという）とノウサギ hare（大ウサギ）の2種に分けて説明すれば充分であろう。

## 2. ビルマ民話におけるウサギ

ビルマは多民族国家であるが、その過半数を占めるのがビルマ人で、人種的にはモンゴロイドに、民族的にはチベット・ビルマ語族に分類されている。ここで採り上げる民話は、主としてビルマに伝えられてきたもので、Maung Htin Aung の蒐集したものである<sup>(6)</sup>。

Aung の説によると、ウサギはビルマの動物昔話の最大の主人公であるという。彼の蒐集した29の動物昔話のうち、ウサギを主人公としたものは11もある<sup>(7)</sup>。また彼はビルマの民話を研究した結果、その大部分がインド起源であるという通説に反して、ほとんどビルマ独自のものであると主張している<sup>(8)</sup>。つぎにその例話のあらすじを引用しよう。

“ワニが舌をなくしたわけ”では、

カラスに欺かれて炎天の路上におびき出されて死にそうになっているワニを、親切な車屋が二輪車にのせて川に連れ戻してやる。するとワニは恩を仇でかえし、車屋の牛の足に喰いつき離そうとしない。そこにウサギが来て、追い杖でなぐれと注意し、ワニを追い払わせる。ワニはウサギの差出口を怨みにおもい、いつか復讐しようと機会をねらっている。とうとう水を飲みに来たところを捕えるが、ワニはすぐ食べようとはせず、抜け目のないウサギを捕えたことを見せびらかそうとして、川を泳ぎまわる。ウサギはワニの舌にまたがったまま、ワニに大口を開けて笑うようにしむける。ワニが大口を開けたとたんに、ウサギはワニの舌を持って跳び出して逃げてしまう。このためワニには舌がない<sup>(11)</sup>。

また“風邪引きウサギ”では、

森の王ライオンがクマとサルとウサギを大臣に任命し、動物たちを支配しているが、やがてこの連中に飽きてしまい、なんとか口実をつけて喰ってしまおうとする。そこで一計を案じ、自分の口の臭を嗅がせ、それが臭いかどうかを答えさせる。クマは正直に臭いといったので、王様の口が臭いとは不敬であるといって喰ってしまおう。サルは大変に結構な臭いでございますとお世辞をいう。するとライオンは噓をつくとはけしからんといって喰ってしまおう。このようすを見ていたウサギは、風邪を引いていて臭いがわかりません、とうまくごまかして難を逃れる<sup>(10)</sup>。

“金のウサギと金のトラ”という話は、カチカチ山の後半に酷似している。

ウサギが明日の朝早く茅刈りに行こうと誘ってくれたので、翌朝トラは米と肉の弁当包みを持ち嬉んでウサギの家に迎えに行く。ウサギは一緒に出かけるが、包みの中には牛糞と砂しか入れていかない。野原へ来て、トラは早速に茅を刈り始めるが、ウサギはぐずぐずしていて、まず朝食にしようという。働き者のトラは、仕事を続けるから、後で食べると答える。ウサギは「最初に来た者は肉と米を得、遅れて来た者は糞と砂を得る」という格言を忘れないように、と言いすてるや、弁当の置いてある所に馳けて行き、トラのを食べてしまう。真昼になったのでトラが弁当を食べようすると、ウサギのしかないのを審っていると、ウサギは格言の通りのことが起こったといって、トラを納得させる。午後じゅうトラは刈り、ウサギは叢の中で眠っている。日暮れまでにトラは山のように茅を刈るが、ウサギは何も刈らない。トラが茅の束を背にして、家路につこうとすると、ウサギは日向で寝ていたので、熱っぽくて歩けないとこ

ぼす。お人好しのトラは、茅束の上に乗せていってやるという。トラの背に乗って暫く行くと、ウサギは火口箱を取り出してカチカチと石を打ち合わす。トラは不思議に思っ、何の音かと訪ねる。ウサギは悪寒で体中が震え、歯がカチカチカチするのだと欺し、茅の束に火をつけて逃げてしまふ。背中じゅう火ぶくれになったトラが、道傍で何も知らぬ気のウサギを見つけ、裏切者め、殺してしまうぞと怒鳴る。ウサギが君なんか見たこともない、とごまかすと、信じやすいトラは、それではよく似た別のウサギだったのだらうと思う。ウサギは自分にはたくさん兄弟姉妹がいて、皆よく似ているから間違うのも無理はないといい、背中火ぶくれはどうしたのかと訊ねる。トラが訳を話すと、ウサギは一番よい療法は、木の株に火ぶくれをこすりつけることだという。トラは木の株で皮膚を裂かれ血を流す。痛みに耐えかねているトラは、道傍でまたウサギを見つけ、怒って裏切者めと叫ぶ。ウサギはまた不知を切り、血だらけになっている訳を聞く。トラが説明すると、いかにも同情しているように見せかけながら、最良の療法は砂の上に寝ころがることだと教える。トラが川岸に来て、云われたようにすると、砂が傷に入っ、いっそう痛みが激しくなる。トラはまたウサギを見つけて、今度こそ逃がさないぞと吠えつく。ウサギは自分ではないとごまかし、よい井戸の所へ連れて行ってあげるから、そこで傷をすっかり洗うようにすすめる。トラはウサギについて井戸の所へ行き、中を覗きこむ。ウサギは後から突き落として、トラを溺れ死なせてしまふ<sup>(11)</sup>。

ビルマ民話のウサギは、しばしば公平な裁判官でもある。次ぎにその一例を挙げよう。“ウサギの裁判官”というのは、

カワウソとヤマイヌが隣り合っ住んでいて仲間になる。そして各々が集めた食物のすべてプールしておき、その日の終りに丁度半分づつ分ける約束をする。最初の日カワウソがいくらかの小エビを、ヤマイヌがいくらかのバナナを集める。それらは公平に分けられ、ふたりとも満足する。第2日はヤマイヌが筍を集めるが、カワウソは獲物がな。しかしヤマイヌはちゃんと半分づつ分け合う。第3日目にはヤマイヌは何も収穫がな。カワウソは一匹の大きなカワギスを捕える。欲の深いカワウソは、カワギスを4等分して、自分は頭と腹をとり、ヤマイヌにはその余りをやるという。ヤマイヌは美味ところばかりカワウソがとるのは不公平だといっ、争いになる。調停を頼まれたウサギは、鋭利な石でカワギスを頭から尾まで、縦に真二つに裂いてふたりに分けてやる<sup>(12)</sup>。

このようにウサギは、時には賢明で公平であるが、時には狡猾・怠惰で残酷ですらある。しかし時には、狡猾さが仇となるといった趣向の物語もある。“りこうすぎたウサギ”というのは、そういった民話の一つである。

すべての動物を欺してしまったウサギは、今度は人間を欺すことを思い立つ。バナナを入れた籠を頭にのせて老婆が来るのを見ると、その路上で死んだふりをして見せる。老婆が家に帰って料理するつもりでウサギを籠の上にのせたので、ウサギは楽々とバナナを食べてしまふ。

次ぎに村祭をしているところへ出掛けて行き、トラが井戸に落ちているぞと叫んで村人が皆その方へ走っていった隙に、精霊に供えてあったバナナを全部片付けてしまう。増長したウサギは別の村へ行行って、村人の台所を荒してまわる。村人たちが石や棒を持って追ってきたので、ウサギは予め水の無いのを確かめておいた井戸に跳込み、助けてくれ、溺れそうだと叫ぶ。村人たちは本当に水があるかどうか、確かめるために綱を下ろしたので、ウサギは綱を舐めたり唾をかけたりして、水があるかのように見せかけ難を逃れる。しかしバナナの籠を頭に乗せて歩いてきた老爺を、老婆の時と同じように死んだふりをしてだまかそうとし、その企みを見破っていた老爺に訳なく打ち殺されてしまう<sup>(13)</sup>。

以上はウサギを主人公とするビルマの民話の若干を挙げたに過ぎないが、そこに述べられているウサギの性格はほぼ明かであろう。ところが日本の民話に現われるウサギの性格や、あるいは“イナバのシロウサギ”とか“カチカチ山”のモチーフなどは、ビルマや東南アジア諸民族の民話のそれと、著しい類似を示していることが注目される。

### 3. 日本民話におけるウサギ

古事記は元明天皇の和銅5年(712)正月28日に献上された、現存するわが国最古の典籍であるが、その上巻の大国主神の慈悲を述べた条に、いわゆる“イナバのシロウサギ”の物語が載っているの、その書きくだし文を引用しよう。

故、此の大国主神の兄弟、八十神坐しき。然れども皆国は大国主神に避りし所以は、其の八十神、各稲羽の八上比売を婚はむの心ありて、共に稲羽に行きし時、大穴牟遲(大国主神の別名)に傍を負せ、従者と為て率て往きき。是に気多の前に到りし時、裸の菟伏せりき、爾に八十神、其の菟に謂ひしく、「汝為むは、此の塩海を浴み、風の吹くに当りて、高山の尾の上に伏せれ」といひき。故、其の菟、八十神の教に従ひて伏しき。爾に其の塩乾く随に、其の身の皮悉に風に吹き拆かえき。故、痛み苦しみて泣き伏せれば、最後に来りし大穴牟遲神、其の菟を見て、「何由も汝は泣き伏せる」と言ひしに、菟答へ言ししく「僕淤岐の島に在りて、此の地に度らむとすれども、度らむ因無かりき。故、海の和邇を欺きて言ひしく、『吾と汝と競べて、族の多き少きを計へてむ。故、汝は其の族の在りの随に、悉に率て来て、此の島より気多の前まで、皆列み伏し度れ。爾に吾其の上を蹈みて、走りつつ読み度らむ。是に吾が族と就れか多きを知らむ』といひき。如此言ひしかば、欺かえて列み伏せりし時、吾其の上を蹈みて、読み度り来て、今地に下りむとせし時、吾云ひしく『汝は我に欺かえつ』と言ひ菟はる即ち、最端に伏せりし和邇、我を捕へて悉に我が衣物を剥ぎき。此れに因りて泣き患ひしかば、先に行きし八十神の命以ちて、『海塩を浴み、風に当りて伏せれ。』と誨へ告りき。故、教の如く為しかば、我が身悉に傷はえつ」とまをしき。是に大穴牟遲神、其の菟に教へ告りたまひし

く、「今<sup>すまや</sup>急に此<sup>みなと</sup>の水門<sup>こひまろ</sup>に往き、水を以ちて汝が身を洗ひて、即ち其の水門<sup>かまのはな</sup>の蒲黄<sup>い</sup>を取りて、敷き散らして、其の上に輾転<sup>い</sup>べば、汝が身本の膚<sup>い</sup>の如、必ず差えむ」とのりたまひき。故、教の如<sup>い</sup>爲しに、其の身本の如くなりき。此れ稲羽<sup>いなば</sup>の素菟<sup>しろうさぎ</sup>なり。今者に菟神<sup>い</sup>と謂ふ。故、其の菟、大穴牟遲神<sup>い</sup>に白ししく、「此の八上神は必ず八十比売<sup>い</sup>を得じ。俗を負へども、汝命<sup>い</sup>獲たまはむ」とまをしき<sup>(14)</sup>

とあるのがそれで、オキの島から気多の崎に渡ろうとしたウサギが、ワニを欺いて成功しそうになるが、渡りきる直前に「お前たちは自分に欺かれたな」と口走ったことから、最後のワニに捕われ、毛皮を悉く剥がれてしまい、赤裸にされたというのである。今井似閑が塵袋第10に白兎と題し、冒頭に「因幡ノ記ヲミレバ」と云って述べているところも、やや文辞に修飾が加えられているけれども、ほぼ同一の内容を示している<sup>(15)</sup>。ただここでは、ワニという魚とあっており、これまでの通説でも古事記のワニは、海のワニといていることから、ワニザメまたはフカであろうということになっている<sup>(16)</sup>。

けれどもビルマ民話などから見て、イナバのシロウサギのワニも、やはり crocodile なのではあるまいか。ビルマだけでなく東南アジアの民話には、土地柄からワニの登場するものが少なくない。ワニとウサギの智恵くらべの物語も、既に引用した例以外にも存在する。ただ残念なことに、イナバのシロウサギと、登場する動物もモチーフも同一である民話は、今のところ知られていないようである。しかしモチーフだけでいえば、マライの次の民話のように、甚だ似かよったものがある。

「ある時小ジカのブランドという動物が川を渡ろうとしたが、ワニの多い川なので泳いで渡る勇気がない。そこで一計を案じ、川岸で日向ぼっこしていたワニの王様に話しかけた。全体、この世界で小ジカとワニとどちらが多いだろう、というとワニは、この川だけで千以上のワニがいる、と威張るので小ジカは、それでは全世界にどれだけいるのか分からない、と驚いてみせ、この川にいるワニを一度みな呼び集めて数えさせてくれと申込む。ワニの王様は、すぐにワニを水面に浮き上がらせ、小ジカの注文で川岸から川岸へ一列に並ばせ、数えやすいようにした。そこで小ジカは1, 2, 3, 4とワニの背中を跳びはねながら数えて行き、対岸に渡ってしまったから、たくさんの部下の面前で、まんまと欺いてやったとワニの王様に恥辱を与え、森林に消え失せてしまった」<sup>(17)</sup>

この民話はウサギが小ジかに、海が川に、結末の不成功が成功に変わっているほか、イナバのシロウサギとほとんど同工異曲と云ってよいであろう。したがって東南アジアの民話にウサギとワニの組み合わせが屢々見られることと考え合わせると、イナバのシロウサギのワニは crocodile であり、その故郷は南方である可能性が強い、と推定される。

この可能性は、カチカチ山式の民話の分布や系譜を調べてみると、いっそう大きなものであることが分かる。現在一般に広く知られているカチカチ山の物語は、前半と後半とそれぞれ別種のモチーフによって成り立っている。すなわち前半は人間と動物の智慧くらべ・闘争の物語で、

爺さんが畠で種蒔をしているとタヌキ（あるいはムジナ・サル・キツネなど）が出て来てからかう。怒った爺さんが計略でタヌキを捕え、晩にタヌキ汁にするからといって罀に吊るし、婆さんに逃がさぬよう注意して、また畠に出て行く。吊されたタヌキは、婆さんが大儀そうに仕事をしているのを見て、仕事を手伝うから縄を解いてくれと欺し、婆さんを殺して婆さんに化けている。そこに爺さんが帰ってきたので、タヌキ汁だといって婆さんを喰わせ、逃げてしまう。

後半は動物同志の智慧くらべ・闘争がモチーフで、

狸汁を喰わされて爺さんが歎いていると、ウサギが現れて慰め、敵討をしてあげよう、と約束する。ウサギはタヌキ（時にはクマ・サル・イノシシ・ムジナなど）を山に連れ出し、茅を刈った束をタヌキに背負わせ、それに火をつけて大火傷させる。さらに火傷の薬だといって、タヌキに味噌や松脂などをつけさせ、最後には釣りに行くとしてタヌキを土舟に乗せ、沈めて溺れ死なせる。

このように現在のカチカチ山では、二つのモチーフが一つの物語に結合されているが、その原型においてはそれぞれ別個の物語であったと推定される。その理由は日本の各地に残っているカチカチ山の民話には、前半だけとか後半だけというのが少なくなく、東南アジアでも同じような事情であるからである。それが日本では、いつの間にか結びつけられ、前半の陰惨な印象が、後半の敵討によって幾分和げられると同時に、ウサギがいかにも正義の体现者のような体裁をとるのが普通となった<sup>(18)</sup>。しかしウサギが活躍する後半だけを切り離してみると、その悪どいサディスティックなまでのいたずらの連続は、一体何を意味させようとしているのか疑問に思われるほどである。そのディテイルを示すために、岩手県岩手郡で語られているカチカチ山のあらすじを例にとってみよう。

クマとウサギが山へ薪をとりに行く。クマは一生懸命に働いてたくさん木を伐るが、ウサギは怠けて少ししか伐らない。帰る段になり、クマはうんと背負い、ウサギは少し背負う。それなのにウサギは「ああ、難儀だ難儀だ」とこぼし、薪はおろか、ついには自分までクマに背負ってもらふ。そしてクマの背中で、ウサギは火打石で火を切る。クマが「ウサギどのウサギどの、背中の方で音がするが、あれはなんでござるな」と訊ねる。「クマどの、あれはカチリ山のカチ鳥の声さ」とウサギは何気なく答えて、今度は火をほうほうと吹く。クマが「あのほうほうという音はなんでござるな」と訊ねるとウサギは「あれはボウボウ山のボウボウ鳥さ」と答え、

クマの背中から跳び下りて逃げてしまう。大火傷をしたクマがうなりながら山を越えていくと、ウサギが藤臺を伐っている。クマが「さきほどはよくも俺を欺して火傷させたな」というと、ウサギは「前山のウサギは前山のウサギだ、藤山のウサギは藤山のウサギだ。俺がなに知るべき」と不知を切る。クマはなるほどと思い、藤を伐ってどうするのか訊ねる。ウサギは藤臺で手足を縛って、山からころげ下りて遊ぶのだと説明する。クマが面白そうだと思ってやってみると、谷底までころげ落ちて死ぬ思いをする。ようやくクマが山をこえて行くと、ウサギは日向でタデ味噌を作っている。クマが詰ると、ウサギは藤山のウサギとタデ山のウサギは別だと不知を切る。クマは納得して、何を作っているのか訊ねる。ウサギはタデ味噌といって、火傷や打傷の妙薬で、町へ売りに行こうと思っていると答える。クマが自分の火傷や打傷につけてもらおうと、塩気がしみて耐えられなくなる。クマがやっと山を越えて行くと、ウサギが杉板を挽いている。クマが詰るとウサギは同じように不知を切る。クマは道理だと思い、杉板を何に使うのかきく。ウサギは舟を作って、川で魚をたくさんとるつもりだという。クマは仲間に入れてくれといい、ウサギは白いからというので杉板の舟を、クマは黒いからというので土舟をこしらえる。川へ乗り出すと、ウサギはわざとクマの舟に突き当てたりして沈ませ、竿でクマを深い淵につきのめして殺してしまう<sup>(19)</sup>。

この物語は、トラがクマに変わっているほか、ビルマ民話の“金のウサギと金のトラ”とほとんど同一であり、ビルマの北東部に住むシヤン民族の民話の中にも、対比できるものがある<sup>(20)</sup>。そこで問題になるのは、“イナバのシロウサギ”や“カチカチ山”のウサギが、日本固有のものであるかどうか、もしどこからか渡ってきた物語であるなら、それはいつごろ、どこから、どのような経路によってであるのかということであろう。

#### 4. チベットとモンゴリアの民話におけるウサギ

民話はいつ、だれが、どこで、どのようにして語り始め、人々の間に広まったのか明瞭でないにもかかわらず、そのテーマやモチーフは世界的におどろくほどの共通性を持っていることが屢々である。そこでその源流や伝播の経路の追求がさかんに行われた結果、現在世界中に広まっている民話のかなりの部分が、インドに起源を持つと推定されるにいたった<sup>(21)</sup>。しかし、“イナバのシロウサギ”や“カチカチ山”がインドに起源すると考えるのは、そこに描かれているウサギの性格からみて、困難のようなのである。インド文化は仏教の伝来につれて、6世紀のころから、急速に日本に広がったが、古事記に見える“イナバのシロウサギ”はその影響を受ける以前のものと思われる。

また仏教伝来の以前から、日本文化に至大の影響を与えていた漢民族の文明につい

て考えてみても、その民話に賢明または狡猾なウサギが活躍する例は、寡聞にして知ることができない。もっともシナには、ウサギを狡猾な動物とする格言や俚諺のたぐいはかなりある。ずるがしこいウサギが三つのかくれ穴をもって難を逃れるというのに喩え、人の難を免れるに巧みなことを「狡兎三窟」(戦国・斉策)とか「狡兎三穴」(埤雅, 宋史)とかいい、「狡兎死良狗烹」<sup>(22)</sup>(史記・越世家)ということわざもあり、狡猾な容貌を形容して「兎頭蛇眼」<sup>(23)</sup>ともいう。これらのウサギということばの用例からみて、民話の中でもウサギを狡猾な動物として描いたもののある可能性は考えられるが、今のところその実例に接することはできない。

ところがビルマと同じ語族に属するチベットには、類似の性格を持つウサギの登場する民話はいくつもある。1904年 Younghusband 大佐がチベットのラサに進撃した時、通訳として随行した W. F. O'Connor 大尉の蒐集したチベット民話<sup>(24)</sup>には、ノウサギ hare を主人公とするものが5つ含まれ、いずれもその機智を題材にしている。その一例として、“ノウサギの兎唇<sup>みづくち</sup>となったわけ”の梗概を引用してみよう。

ノウサギが道で突然トラに遭遇し喰われそうになる。ノウサギはもっと大きな動物を探し出すからといって、喰うのを延ばしてもらい、連れ立って歩いてゆく。やがて夜となり闇となると、ノウサギはピチャピチャと唇を鳴らして、何か食べている振りをする。トラが訊ねると自分の眼を食べているという。トラが欺されて、両眼とも食べてしまったので、ノウサギはトラを崖縁におびき出し、火をつけた柴をつきつけて、崖から落としてしまう。トラは途中の木の枝に噛みついて、かろうじて落下を防いでいると、上から窺っていた、ウサギは、元気なら、ああと声を出してくれと頼む。トラはノウサギを心配させてはいけなと思って、ああといったばかりに、直逆様に墜落し、岩にぶつかって死んでしまう。翌朝ノウサギは道で会った、たくさんウマを連れた男に、トラの死んでいる場所を教える。男が嬉んで、トラの皮を剥ぎに峡谷に降りて行くと、ノウサギはカラスを呼んで、ウマの背の痛い所を突っつけとけしかける。カラスに突かれて、ウマは四方八方に馳け去る。つぎにノウサギはヒツジ飼いの少年に会い、カラスが留守の間に、巢から卵を盗めという。少年が樹にのぼっている隙に、ノウサギはオオカミをつれてきて、ヒツジの群にけしかける。これだけのことをしておいて、ノウサギは山の頂上に登り、あたりを見廻す。そこからは、自分のした悪戯のすべてが眺められる。それがあまりおかしいので、手ごろな石に寄りかかって、大笑いに笑う。余り笑いすぎたので、とうとう上唇が裂けて、兎唇になってしまう<sup>(25)</sup>。

また四川省の康定県(打箭爐)のチベット人の民話<sup>(26)</sup>を集めた中に、ウサギの機智を扱ったものが4つ収められている。その一つの“ヒツジとオオカミ”を例に挙げよう。

ある日ヒツジの母子がオオカミに見つかり、喰われそうになるが、明日までもう少し肥え



てくるからといって、ようやく一日だけ命を延ばしてもらう。そしてあと一日の命と歎いていると、ウサギがやってきて、よい知恵を貸してくれる。翌朝ウサギは木と紙で作った案々子のようなものを持って母ヒツジの背に乗り、オオカミの住む山にやって来て、われわれは既にシカ、キツネ、ヤギの皮を手に入れてしまったから、今日はオオカミの皮が欲しいものだと大声に叫ぶ。これを聞いたオオカミは、驚いてトラのところに駆けつけ、一緒に敵を倒すように頼む。ウサギはトラとオオカミが近づくのを見ると、そこへ寄って行って、お前が売ってくれると云ったトラはこれか、それならすぐ皮を剥ごう、とオオカミに呼びかける。トラは欺されたと思い、オオカミを殺して逃げ出し、自分も岩にぶつかって死んでしまう<sup>(27)</sup>。

このようにチベットの民話でもウサギは優者であるが、モンゴルの場合も事情はよく似ている。「機智に富むウサギ<sup>(28)</sup>」は、オオカミに喰われそうになった小ウマを、ウサギが助ける話であり、「キツネとウサギ<sup>(29)</sup>」は小女から騙しとった焼餅を、キツネが独占しようとしたのに対し、ウサギが巧みにキツネを釣りにさそいこみ、その隙に焼餅を取りかえす物語である。このようにモンゴルの民話がチベットと類似しているのは、あるいはラマ教を通じて結ばれている緊密な関係によるのかも知れない。

## 5. むすび

以上いくつか挙げた例話から分かることは、日本の民話に現われるウサギの性格は、モンゴリア、チベット、ビルマ、シヤンなどのものと著しい相似があるということである。さらにモチーフやテーマの類似を併せて考えるならば、また言語における構造の親近性などとも関連して、これら諸民族の利口なウサギの民話が、相互に全く無関係に成立したものとは考えられない。ことに「カチカチ山」はビルマやシヤンの民話に酷似したものがあり、「イナバのシロウサギ」はその構成において、きわめて南方的な要素を含んでいる。したがって日本民話の中のウサギは、その故郷を東南アジア、ことにインドシナ、とくにビルマ、またはその先行者に求めらるべきではあるまいか。ビルマが日本民話の直接の祖先とは考えられないし、また伝播の経路も明かでないが、ウサギを主人公とした民話が、数も豊富であり、さまざまなテーマやモチーフを含んだもののあることから見て、現在のビルマ人が継承している文化の、原型の保持者が、利口なウサギの物語を持っていたであろうという推定は、それほど根拠のないものではあるまい。ちなみにアメリカ歴史学派の C. Wissler が、文化領域の中心を推定する方法として、独自の文化特色のすべてを所有する部族を求めたことや<sup>(30)</sup>、植物地理学的微分法のバビロフが栽培植物の発生地を求めるのに、最も多くの変種を包含する変異集積中心地を当てていること<sup>(31)</sup>なども参考にされよう。

さて、日本では“イナバのシロウサギ”と“カチカチ山”型の民話が早くからあり、ことに前者はその成立の年代の下限が8世紀の初期にまで遡れるというだけでも重要な意味を持っているが、その後一般民衆の間には拡がらなかったらしい。これに対して後者は、さまざまなヴァリエーションを生みつつ、日本の各地で語りつがれてきた。その起源、経路、系譜は明かでないが、その伝播の過程で現在多くの地方で語られているような、ウサギによる勧善懲悪譚の形式に纏められたのではあるまいか。その時期がいつごろであったかを明確にする資料はないけれども、前後半の結合が成立するには、ウサギの性格の評価に一つの転換があったことは否定できないようである。もしこの考え方が正しいとすると、たとえば鎌倉初期に成立したと見られる伝・鳥羽僧正筆の鳥獣戯曲が、多様な姿態のウサギを描きながら、いかにも無邪気に見えることや、今昔物語集をはじめ、お伽草子など、鎌倉から室町にかけていくつかの物語集が編纂されていることからみて、このあたりに現在の勧善懲悪譚の原形の成立を考えることができよう<sup>(32)</sup>。

〔注〕

- (1) 『世界民話全集』第7巻・東南アジア篇, iv. 298 p. 関敬吾解説。東京, 河出書房, 1954年の中にチベット2篇, ビルマ7篇を収載。
- (2) Maung Htin Aung: "The Burmese folk-tales". xxxii, 250p., OUP, 1948. xvi に「ウサギは、マラヤの Mouse-deer (白アシのネズミ?), ニグロの Brer Rabbit, ヨーロッパのライネケ・ギツネと対比される(ビルマ民話の)主人公である」とある。なお Aung は、ビルマの民族学者で、1946~59 ラングーン大学学長の職にあった。
- (3) 『南方熊楠全集』第1巻, 十二支考(1)の p. 83~111. 「兎に関する民俗と伝説」1915年, に世界各地の例が列挙されている。なおボンネル著, 民族学協会訳「ベンガル民族誌」(1926), 三省堂1944年, のp. 15に「ウサギは神秘的な動物で, また凶兆の動物である。船乗や漁師は船上でその名を口にするのは不吉として慎む」とあり, フレイザーの「金枝篇」にも穀物霊の化身としてのノウサギの例が述べられている。(岩波文庫版, 第3巻, p. 250-1)
- (4) 岩波版「生物学辞典」(1960) p. 1120 動物分類表による。平凡社版「世界大百科辞典」はウサギ科をノウサギ属とアナウサギ属とに分け, 地中海沿岸の原産である後者が, イエウサギの先祖であると述べ, さらにその下に計20数種があるという。北陸館版「原色動物大図鑑」I (1957) には, アマミノクロウサギ, ノウサギ, ナギウサギ, , カイウサギ, アンゴラウサギが収録されている。
- (5) 南方前出 p. 83~8. ただし, トビウサギは外貌, 習性ともにカンガルーに類し, 別種であるという。
- (6) Maung Htin Aung, op. cit., & "Burmese law tales—The legal element in Butmese folklore", x, 157p., i., OUP, 1962.
- (7) Aung, op. cit. 1. Animal tales, p. 1-65.

- (8) Aung, “Burmese law tales”, vii. Preface, dc,  
 (9) Aung; “The Burmese folk-tales”, p. 23~7  
 (10) do., p. 10~1  
 (11) do., p. 29~32.  
 (12) Aung; “Burmese law tales”, p. 65~6.  
 (13) Aung; “The Burmese folk-tales”, p. 35~7  
 (14) 岩波版『日本古典文学大系』第1巻「古事記・祝詞」, p. 91~3. これとほぼ同文のものが、平安朝初期の偽書といわれる先代旧事本記にも見える。改造文庫本「旧事記」p. 81~3.  
 (15) 岩波版『日本古典文学大系』第2巻「風土記」p. 478~9 に引用さる。その白兎と題する全文は下記の通り。

因幡ノ記ヲ見レバ、カノ国ニ高草ノ郡アリ。ソノ名ニニノ釈アリ。一ニハ野ノ中ニ草ノ高ケレバ、高草ト云フ。ソノ名ヲ郡ノ名トセリ。一ニハ竹草ノ郡ナリ。コノ所ニモト竹林アリケリ。其ノ故ニカク云ヘリ。(竹ハ草ノ長ト云フ心ニテ竹草ト云フニヤ。)其ノ竹ノ事ヲ明カスニ、昔コノ竹ノ中ニ老タル兎スミケリ。或時、俄カニ洪水出デキテ、ソノ竹原、水ニナリヌ。浪洗ヒテ竹ノ根ヲ掘リケレバ、皆壊ゾレ損ジケルニ、兎竹ノ根ニ乗リテ流レケル程ニ隠岐ノ島ニ着キヌ。又水量落チテ後、本所ニ帰ラント思ヘドモ、渡ルベキ力ナシ。其ノ時、水ノ中ニワニト云フ魚アリケリ。此ノ兎、ワニニ云フヤウ、「汝ガ族ハ何ホドカ多キ。ワニノ云フヤウ、「一類多クシテ海ニ充チ満テリ」。ト云フ。兎ノイハク「我が族ハ多クシテ山野ニ満テリ。マズ汝ガ類ノ多少ヲ数ヘム。コノ島ヨリ気多ノ崎ト云フ所マデ、ワニヲ集メヨ。一タニワニノ数ヲ数ヘテ、類ノ多キ事ヲ知ラム」。ワニ、兎ニ驅カラレテ、親族ヲ集メテ、背ナカヲ並ベタリ。其ノ時、兎、ワニドモノ上ヲ踏ミテ、数ヲ数ヘツツ竹ノ崎ヘ渡リ着キヌ。其ノ後、今ハ為リセツト思テ、ワニドモノニ云フヤウ、「我、汝ヲ驅リテ、此処ニ渡リ着キヌ。実ニハ親族ノ多キヲ見ルニハアラズ」ト嘲ケルニ、水側ニ沿ヘルワニ、腹立チテ、兎ヲ捕ヘテ、着物ヲ剥ギツ。(カク云フ心ハ、兎ノ毛ヲ剥ギ奪リテ、毛モナキ兎ニナシタリケリ。)ソレヲ大己貴ノ神ノ憐ミ給テ、教ヘ給フヤウ、「蒲ノ黄ヲ扱キ散シテ、其ノ上ニ臥シテ転ベ」ト宣フ。教ヘノ随ニスルトキ、多ノ毛モノノ如ク出デ来ニケリト云ヘリ。ワニノ背ヲ渡リテ数フル事ヲ云フニハ、兎踏其上、読来渡ト云ヘリ。

すなわち、これによればウサギはもとオキの島にいたのではなく、本土から洪水で流されて行ったものということになっている。

- (16) 前出「古事記・祝詞」p. 91 の頭注31に、「鰐、海蛇、鰐鯨などの諸説があるが、海のワニとあることと、出雲や隠岐島の方言に、鰐や鰐をワニと言っていることを考え合せて、鰐と解するのが穏やかであろう」といい「風土記」p. 478 の頭注11は「ワニザメ。鰐の一種」と解している。しかし本文で述べたように、ここのワニは本来は鰐であったのが、後に鰐の知識を失った結果、フカヤサメに附合されたのではあるまいか。  
 (17) 堀岡文吉「日本及汎太平洋民族の研究」東京、富山房、1927年、p. 339-348. cf. 東京堂版「神話伝説辞典」1963年、p. 69, “いなばのしろうさぎ”の項  
 (18) 関敬吾『日本昔話集成』第1部「動物昔話」336p., xix, 角川書店。1950年、p. 175~210 に日本各地に伝承される「勝々山」の類話が集大成されている。A型は前半だけ、B型は後半だけ、C型は前後結合型、D型は後半にウサギの尻尾の短くなった由来が付加されたものであるが、C型は最も多く、東北から九州まで全国的に分布している。  
 (19) 関敬吾「こぶとり爺さん・かちかち山——日本の昔ばなし(1)」岩波文庫1956年、p. 206~214.

20) A. B. ミルン著、牧野巽・佐藤利子訳「シャン民俗誌」(1910)、生活社、1944年、p. 287～9。  
 “虎と意地悪兎”をそのまま転載する。昔は、虎と兎は仲良しでした。けれども、これは本当の仲良しではなかったのです。兎の方では、上べだけ装っていたのです。或日、兎は虎さん、私達はかうしていつも、野天に住んでゐるのは、良くありませんね。私達には家がないから、一つ小さい家を建てようではありませんか。明日は、屋根にする草を刈るとよろしいですよ」と云ひました。虎は「さうですね、私達が同じ心になって、一っしょにやれば、どんなことでもきっと成功しますよ」と答へました。翌朝早く、二人は緑の葉に、御飯とカレーを包んで、それに小刀と鎌とを持って、大きな森へ這入ってゆきました。一日中、二人は森の小川の傍に生えている草を刈りました。そして、夕方、二人は刈った草を束ねてそれを背負ひました。そして、家路につきました。途中兎は嘘をついて、「ああ、虎さん、私は気分が良くない。もうこの草の束を背負っては、一走も歩けない」と云ひました。虎は兎が熱でもあるにちがひないと思ひましたので、親切にも、「では、その草の束を背負った儘、私の背中に乗りなさい。」と云ひました。そこで、兎は、虎の背中に乗りました。暫くすると、兎は悪戯心を起こして、虎の背中の草に火をつけました。これは燐石を金に打当ててつけたのです。虎はその音を聞いて、「何をしているのですか」と訊きました。兎は「私は身震ひがする。あなたの聞いた音は、私の齒のカチカチいふ音ですよ」と答へました。かうして意地悪兎は、草を燃えあがらせておいて、飛降りて逃げ去りました。草がもえるので、虎は苦しがつて、どうしたらよいかわからず、北へ南へ走り、東へ西へ走りまはりしました。初めに虎は牝牛のところへ走って行って、「どうしたら火が消せるでせう」と訊きました。牝牛は、「まあ、虎さん、山へ馳け登りなさい。」と云ひました。けれども、火は益々烈しく燃えました。それで虎は大困りして、馳け降りますと、水牛に会ひました。水牛は「水に這入るとよい、私の背中に乗りなさい。湖の中へ連れて行って上げよう」と云ひました。そして親切な水牛は、虎を乗せて東の湖へ行きました。虎は「まあ、水牛さん、もしあなたがいてくれなかったら、私は死んでしまうところでした」と申しました。かういうわけで、今でも水牛の頸には、虎が爪を掛けた痕があり、虎の皮には、皆、草の燃えた痕の茶色の縞がついているのです。虎は今でも、牛や仔牛を殺そうとしますが、水牛には手をつけません。

さて、虎は兎に対して腹を立て、到る処、兎を捜し求めて歩きまはりしました。兎は怖くなって、逃げ出しましたが、くたびれて、とある大きな木の枝から下っている、大きな蜂の巣の下に坐つてやすみました。虎は兎の方へ飛んで来て、「さあ、兎奴、殺してやるぞ」と云ひました。兎は「私は何もあなたに悪いことなどしませんよ。私はあなたの背中から落ちたのです。そして、あれからずっとここに坐っているのですもの。私はこの木に懸けてある、お祖父さんの銅鑼の番をしているのです」と答へました。虎は「では、その祖父さんの銅鑼を、ちょっと叩かせてくれませんか。いい音がするかどうかみたいです」と云ひました。兎は「叩かせてあげることはできません。お祖父さんが、とても慥りなさるでせうから」と答えました。けれども虎は「私はお祖父さんに聞えないように、そっと触ってみます。だから慥られはしないでせうよ」と云ひました。それで兎は「では叩きたければ叩きなさい。けれども、その前に私を逃げさせて下さい。お祖父さんに捕まへられないやうにね」と云ひました。そして兎は逃げました。それから虎は、前脚で蜂の巣を叩きました。すると蜂共は、何百匹となく虎に襲ひかかつて、その顔を酷く刺しました。今でも顔に茶色の痕があるのは、この蜂に刺された痕なのです。それで虎は益々兎に腹を立て、兎を殺そうと追っていきました。その後数々の事件がありましたが、いつも虎は兎にいちめられました。

- 或時、兎は穀蔵の穴へ落ち込みましたが、後から追って来て、飛び込んだ虎の背へ飛びついて、それから虎の背へ飛びついて、それから虎の頭に上り、到頭虎を置き去りにして逃げてしまひ、虎は其処で死んでしまひました。
- (21) 関敬吾「民語」岩波新書、1955 年およびイン起源のものについては、岩本裕「インドの説話」紀伊国屋新書、1963 年など参照。
- (22) 諸橋轍次「大漢和辞典」巻 7、1958 年、p.7603~4 “狡” の項
- (23) 石山福治「最新支那語大辞典」1953 年、p.139~40. “兎” の項
- (24) W. F. O'Connor; “Folk-tales from Tibet”, xii, 176p., 1906, London. 収録されている 22 話のうち、1. How the hare got his lip split; 7. The Kyang, the fox, the wolf and the hare; 9. hare and the lions; 10. The sheep, the lamb, the wolf and the hare; 11. The story of how the hare made a fool of the wolf の 5 話は、ウサギの機智を主題とする。
- (25) do., p.1~6.
- (26) 西南師範学院中文系康定採風隊編「康定藏族民間故事集」, ii, 86p. 北京。1959 年、p.76~86 に「兎子」の名の下に、“失算的喇嘛” “羊和狼” “兎子与狼” “魔鬼和兎子” の 4 話を収める。
- (27) 同上、p.77~9
- (28) 中国科学院内蒙古分院語言文学研究所編「蒙古民間故事集」xi, 248p., 上海。1962 年。p. 120~2, “機智的兎子”
- (29) 同上、p.123~4, “狐狸和兎子”。なお狐狸はキツネとタヌキではなく、口語でキツネの意。
- (30) C. Wissler; “Man and culture”, New York, 1923. 石田英一郎・寺田和夫・石川栄吉, 「人類学概論」東京, 1958 年, p.272~7.
- (31) 木原均「小麦の祖先」東京, 1947 年。p.44~7.
- (32) 前・後半の結合型は江戸初期の延宝 (1673~81) ごろの赤小本「兎の手柄」あたりまで文献的に遡れるが、それ以前については資料が全くない。しかし前後独立の話が、それより早く存在したことは疑いないが、その始源は不明である。「神話伝説辞典」(前出) 参照。

## 〔追 記〕

Maung Hin Aung は彼の収録した民話を、A. Aarne & S. Thompson; “The types of the folk-tale. A classification and bibliography”, FF Communications No. 74, Helsinki, 1928 に分類されたタイプにそれぞれ比定しているので、注の番号によってそれを示しておく。(9)はNo. 6, (10)はビルマの諺, (11)は No. 9, (12)は “Princess Learned-in-the-Law Pyat-hton, (13)は No. 1. である。なお Aarne & Thompson の分類のうち、ウサギまたは、ノウサギが主人公となっているものは、つぎの通りである。

No. 70. “More cowardly than the hare.” The hare finds one (sheep, fish, frog, etc.) who is afraid of him and laughs till his lip splits. (エストニア, フィンランド, ラブランド, ノルウェー, スウェーデン, リヴォニア) cf. 注 (25) の民話

No. 71. “Contest of frost and the hare.” The hare lies on the frozen snow and says, “Oh, how warm!” (エストニア, フィンランド)

No. 72. “Rabbit rides fox a-courting.” The fox is the favorite suitor of the girl the rabbit wants. The rabbit tells the girl that the fox is his horse. She refuses to believe him. She agrees to marry rabbit if he will ride fox to her house. He persuades fox to carry him—

usually by feigning lameness—and wins the girl. (アメリカ・ニグロ, インディアン)  
No. 73. "Blinding the guard". The rabbit, imprisoned in a hollow tree, induces his guard to look up at him. He spits tobacco juice into the guard's eyes and blinds the guard, and thus effects his escape. (アメリカ・ニグロ, インディアン)

(1963. 11. 10 稿)

〔補 遺〕

補遺・間宮直香編訳「インドネシアの民話」(世界の民話3) 228P., 1958,  
未来社に収められているボルネオのダヤク族の民話「麝香鹿譚」および「麝香鹿と巨人」は、ブランドッグとよばれるジャコウジカの狡智を主題としたものであり、ことに前者の物語の中にはシャン民話の「トラと意地悪ウサギ」と酷似した筋が、ジャコウジカとブタおよびシカとの間で展開されている。この民話の主人公であるブランドッグは、堀岡文吉「日本及汎太平洋民族の研究」所収のマラヤ民族の民話で、ワニを欺いて川を渡るブランドという小ジカと同じ動物のように思われる。もしそうであるとすれば、ビルマでウサギが演じている役柄を、マラヤやボルネオではブランドッグが演じていることになり、モチーフの類似と主人公の転換がいかになしておこったかは興味のある問題であろう。

(1963, 12, 20)

(本 学 助 教 授)